

京都大学	博士（文学）	氏名	金 奎運
論文題目	古墳からみた6～7世紀日本列島と韓半島		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>日本列島と韓半島の間では、海域で阻まれる交通上の障害にもかかわらず、地域と地域を越える活発な交流をおこなってきた。なかでも、日本の古墳時代と韓国の三国時代は、両地域間での文物と人々の相互往来が最も活発であった時代と認識されている。こうした日本列島と韓半島の関係を窺うことができる考古資料は数多く出土している。日本列島では、土器をはじめ、金工品、鉄器類などの様々な韓半島系の遺物が確認されており、韓半島でも日本列島系の須恵器や甲冑、貝製品などが確認されている。このような両地域間の交流を垣間見ることができるとする遺物に対する分析をもとに、日韓交流に関する考古学的研究は、各分野で活発に行われ、多くの成果が蓄積されてきた。</p> <p>しかし、このような研究は細分化され、個別の遺物そのものの分析に集中し、その解釈がそれぞれの文物交流に対する説明にとどまっている。そのために、考古資料の分析を通じた両地域間の相互作用の全体的な流れを把握できていないのが実情である。このような研究の現況について、いくつかの問題点が指摘できる。</p> <p>まず、墓制に関する研究の問題があげられる。日本列島の古墳時代を考える上で、横穴式石室と横口式石槨の出現は、二つの大きな画期であった。そしてそうした変化には、韓半島、特に百済との関係があることは明かな事実である。しかしこれまでは、その類似性を指摘するだけで、本格的な比較検討をおこなった研究は多くない。したがって、本格的な墓制の比較検討を通じて両地域間の関係を明らかにする必要がある。</p> <p>次に、地域中心的な観点からの脱却の問題があげられる。交流関係を窺うことのできる考古資料に対する解釈は、主に研究者が属している地域を中心としておこなわれてきた。本論文では、このような地域中心的な観点から脱して、客観的な観点から両地域を比較し、それによって一貫性のある解釈を試みたい。</p> <p>第3には、1対1の対等な比較、という観点があげられる。今までの墓制を通じた日本列島と韓半島の比較研究では、対等に比較する観点が不足していた。両地域の全体的な流れを把握せず、形の似た石室をいくつか探すことで、その起源に直結させる傾向があった。したがって、このような観点から脱し、両地域の脈絡を明確に把握して、対等に比較検討をおこないたい。</p> <p>以上で言及した観点には共通点がある。それは‘context’の重要性である。考古資料の分析において最も基本的かつ重要な視点が、contextの把握であると考えられる。これは「状況」もしくは「脈絡」と解釈でき、出土状況、分布定型、変化様相などは、全てこの‘context’を含んでいるのである。結局、単に個々の考古資料の比較より、共時的・通時的な脈絡を把握することが、交流研究において最も重要であると考えられる。</p> <p>以上のような観点から、第一部では6世紀を前後する時期の様相を、第二部では7世紀の様相について検討をおこなった。</p> <p>第一章では、漢城期百済の横穴式石室について、玄室平面形態や規模、羨道の位置を基準に型式分類を試み、4つの型式を提示した。これら4型式の展開様相をみると、玄室平面長方形のⅢ型式が、南井里119号墳のような楽浪故地の石室の影響で、百済で最初に出現した。その後、漢江流域と錦江流域ではⅢ型式とⅣ型式を中心に、錦江下流域の一部では、Ⅰ・Ⅱ型式の横穴式石室が導入される。この段階には、同じ型式の石室であっても、細かな様相には差異が大きい。次の段階には、規格性を備え</p>			

たⅣ型式の石室と、宋山里型石室につながるⅡ型式の石室が、排他的な分布範囲をみせつつ築造される。

第二章においては、畿内地域における初期横穴式石室を検討した。石室の平面形だけではなく、規格、埋葬方式、遺物の構成、周辺遺跡との関係などを元に検討した結果、2つの類型に分類することができた。1類型は、ほぼすべての要素で百済と共通するため、百済から直接伝播したものと考えた。これに対して2類型は、在地の伝統的な要素が強く反映されているため、横穴式石室という新しい墓制を在地の基盤の上に主体的に導入して、模倣築造したものと把握した。そして、第一章で分析した資料を根拠として、漢城期末に百済中央地域の石室から影響を受けたことを明らかにした。特に1類型は、ほぼすべての要素で百済と同様であるため、百済から直接伝播されたものと考え、その被葬者を渡来人と想定した。このような渡来と墓制の伝播は、単なる個別的な交流ではなく、当時の王族外交などを通じた中央と中央との交流関係のなかで成立したものと理解した。

第三章では、韓半島における倭系石室をとりあげた。まず倭系石室は、九州地域の石室の要素がそのまま反映された石室と、倭系要素と共に、在地系要素が反映された石室に分かれると考え、その様相によって3つの類型に分類した。1類型は、北部九州系石室をそのまま反映する倭系石室で、長木古墳、角化洞2号墳、新徳1号墳、龍頭里古墳が該当する。2類型は、肥後型石室などの有明海沿岸の石室をそのまま踏襲する倭系石室で、雲谷里1号墳、郷村洞1号墳、鈴泉里古墳などが属する。これらの2つの類型とは異なり、3類型は、倭系要素に在地の要素が加えられて築造される倭系石室で、船津里石室墳、松鶴洞1B-1号墳、景山里1号墳、伏岩里3号墳96石室が該当する。これらの倭系石室は、在地の首長の墓域に倭系要素と在地要素が加わる形で韓半島に出現し、以後、北部九州系石室をそのまま踏襲する倭系石室が、集中して築造されたと理解した。そして、倭系要素がそろっており、韓半島では型式学的変化がみられず、断絶的である点を根拠として、在地の選択的導入、という主張は認めがたいことを明らかにした。また、倭系石室が築造される状況に対する仮説をもとに、倭系石室は九州地域から渡ってきた造墓集団ではなく、在地の造墓集団によって築造されたものと考えた。

第四章においては、栄山江流域に分布する前方後円墳と倭系石室、そして、加耶地域に分布する倭系石室の分布の様相を共時的に検討した。その結果、3つの類型を設定し、在地首長と同じ墳丘に造営される1類型から単独に造営される2類型へ、また古墳群を形成する3類型に変化すると想定した。また、こうした分析に基づいて倭系石室の被葬者に対する問題を検討した結果、韓半島に倭系石室が造営された際、日本列島と全く同じ古墳を造営することはできなかったが、在地の要素が反映されながらも、墳丘形態と石室は日本列島の独特な形態を強く持っていることがわかった。このことから、その被葬者は倭人であると理解した。

第五章では、第一章から第四章まで試みた分析結果を整理し、これを基に共時的な観点から、6世紀を前後する時期の日本列島と韓半島との関係に関して、特に百済との関係を中心として検討をおこなった。そして、これまで繰り返されてきた微視的な観点から脱して、巨視的な観点から検討を試みた。その結果、5世紀後葉になると、百済中央とヤマト政権は、王権の外交、先進文物の伝播などの緊密な関係の中で、百済系の渡来人によって初期横穴式石室が出現し、これに対してヤマト政権は人的・物的資源を支援したとみた。その過程のなかで、ヤマト政権が九州地域勢力を利用したため、九州地域の石室と前方後円墳が、栄山江流域に築造されることになり、結局、石室の形のみを通して、百済と畿内、栄山江流域と九州のように断続的につながるようになった。そして、この時期の全体的な脈絡からみると、百済中央—畿内—九州—栄山江流域における多様な関係が想定されると考えた。

第二部では、7世紀の様相について検討した。まず第六章では、横口式石槨につい

て型式学的分析をおこない、平面形態における前室と羨道の相関関係を基準として横口式石槨をⅠ～Ⅲ類に分類した。Ⅰ類は、石槨部と前室との規模の差を基準としてⅠA型式とⅠB型式に細分した。またⅡ類とⅢ類は、石槨部の築造方式によって、それぞれⅡA型式とⅡB型式、ⅢA型式とⅢB型式に細分した。これらの型式に関して、出土土器と石槨の型式学的観点から、6世紀末から7世紀末までに編年した。既往の見解では、これらの型式について、石棺系や石室系などそれぞれ異なる系譜関係と認識する傾向があった。しかし今回の検討では、外部から影響を受けたシシヨツカ古墳を祖形として、自律的に型式変化したとみなして、同じ系譜関係のものと把握した。

次に、横口式石槨が時期ごとにどのように分布したのかについて検討した。6世紀末から7世紀前葉に該当する1期には、ⅠA型式の横口式石槨が初めて出現し、これに影響を受けてⅠB型式の横口式石槨が築造され、河内地域に集中的に分布することを確認した。7世紀中葉に該当する2期は、1期に続きⅠB型式が築造されつつも、ⅡA型式やⅡB型式が集中的に築造された。その分布地域は、河内地域だけでなく大和地域にも拡大し、西日本地域の一部でも築造された。3期になると、以前の時期とは異なり、ほとんど完全に石槨化したⅢA型式とⅢB型式が造られ、中心分布地域も、河内地域から大和地域へ移動すると判断された。

第七章においては、横口式石槨の出現に関して、独自発生説では説明できない部分が多く、外部からの影響により成立したと思われることを確認した。さらに、影響を及ぼした地域の候補とされてきた、高句麗と百済における古墳構造の様相について検討した。その結果、起源地として高句麗を想定することは難しく、石室の形態や規格、歴史的背景などからみて、百済からの影響が横口式石槨出現の契機であったと考えた。横口式石槨は、陵山里型石室から影響を受けて出現したのち、在来の築造技術との融合によって次第に規格性を失い、7世紀後葉に改めて百済からの影響を受けた結果、さらに石槨化して築造されたと推測した。

そして、横口式石槨と全く同じ形状の石室が、百済地域で確認されないことから、横口式石槨の被葬者＝渡来人、との想定は難しく、いわゆる今來の渡来人とは無関係であると考えた。そして、横口式石槨は、百済の規格と技術などに影響を受けつつ、在地の築造技術によって築造され、薄葬令の施行とともに、次第に拡散したと考えた。

第八章では、磚槨式石室を、属性分析などの型式学的な分析を通して、ⅠA、ⅠB、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ類型を設定し、その特徴を明らかにした。各類型の年代に関しては、型式学的な変遷と出土土器の分析により、7世紀前葉から7世紀中葉にかけて築造されたことを明らかにした。また、磚槨式石室の起源と被葬者の問題についても検討をおこなった。結論としては、磚槨式石室との比較対照されてきた百済の塼室墳や宋山里型石室とは、時期的に全く重ならない。磚槨式石室には塼は1つも使用されない。しかも、石室の全体的な形態からみて、百済の塼室墳、もしくは宋山里型石室と完全に同じものは1基もなく、むしろ平面形態は飛鳥と河内地域に分布する横口式石槨と類似している点から、磚槨式石室は石材と分布、築造年代からみて、榛原石という独特な石材に起因して築造されるものであると想定した。

以上のように本論文では、古墳を対象として古代日本列島と韓半島との関係について検討した。両地域で新たに受容された墓制、特に横穴系の墓制にはいくつかの共通的な特徴がみられる。まず最も重要な点は、同時期性である。日本列島と韓半島のいずれも新しい横穴系墓制が伝播して受容される際には、必ず同時代のものの影響を受ける。百済で横穴式石室を受容する過程、畿内地域で横穴式石室が出現する様相、韓半島に倭系古墳が築造される過程、そして横口式石槨が出現する過程でも、必ず同時代のものを受容し、模倣する。これは百済以外の韓半島のほかの国家でも、日本列島の畿内地域以外の他の地域でも同様である。したがって、今後、墓制の比較検討をおこなう際には、必ず比較対象の時期の同時性を確保した上で、検討をしなければな

らない。

次に、新しい墓制が受容される際には、在地系の要素が反映されることは当然であると考えられる。これは遺物とは違う要素で、細部的な分析よりも巨視的な観点が必要である。被葬者が渡来したのか、工人が移動したのか、あるいは単に形だけを模倣したのかに関係なく、いずれの場合も、実際に墓を築造する造墓集団全体が移動する状況にはなかったとみてよいと考えられる。そのため、新しい要素とともに、在地系の築造伝統の技法がみられるのは当然である。

また、最も強調したい特質は、百済と日本列島との共通性である。韓半島と日本列島だけではなく、東アジアにおいて竪穴系墓制から横穴系墓制に変化する様相は同一であるが、特に百済と日本列島の場合、他のどの地域よりも類似している。畿内地域における横穴系墓制の採用には、大きく2度のインパクトがある。それは横穴式石室の出現と横口式石槨の出現である。これは百済の影響から始まったものである。しかし、単純に形態を受容することにとどまらず、墓制の変化様相まで共通する点に注目したい。両地域とも、最初に横穴式石室を導入した際、起源になる石室と規格まで同一のものが導入され、その後、自律的に変化して次第に規格性が最も強まりつつ大型化する。その後、横穴式石室の石材として花崗岩を加工した切石を使用する中で規模は小さくなり、さらに規格化される。そして、古墳築造そのものが減少し、火葬墓が導入された。両地域間における横穴系墓制変化の流れが、完全に一致していることが重要である。これは、単純に形態が同一方向に変わることにとどまらず、古墳に対する全体的な認識、埋葬観念の変化も同一である点で重要である。

これまで、横穴式石室と横口式石槨という個別墓制の築造技術の伝播に対してのみ議論がおこなわれてきたが、墓制、埋葬観念の変化にも絶えず新たな影響を及ぼしていたことを認識しなければ、両地域間の関係を正確に窺うことはできないと考えられる。

しかしながら、被葬者問題については、より慎重になる必要がある。百済からの影響を大きく認識した上で、形態的、また時期的に大きくは類似性がないにもかかわらず、被葬者としてはそのまま渡来人を想定する研究が多かった。しかし、両地域の全体的な流れや脈絡を正確に把握した上で、被葬者を比定しなければならないであろう。

(論文審査の結果の要旨)

海で隔てられていながら、日本列島と韓半島の間には、古くから活発な交流があったことは、これまでの文献史学および考古学の研究によって明らかにされてきた。中でも本論文が取り上げた日本の古墳時代、韓国の三国時代における日韓交渉は、古くから注目を浴びてきた研究分野である。しかし、最近の発掘調査でさまざまな遺構・遺物が出土したことにより、従来の説には再検討すべきものが少なくない。本論文は、そうした問題のうち、6世紀および7世紀の関係を、墓制の比較を通して再検討しようとした。

本論文において論者は、研究者が、自分が主に検討対象とする地域を中心として議論を進めてきた点に問題があると考え、複数の地域の考古資料を対等に比較することと、考古資料の歴史的脈絡を把握することが必要であると指摘する。その上で論者は、横穴式石室の出現と横口式石槨の出現という、日本列島の墓制における2つの大きな画期に注目して、検討を進めた。

6世紀を前後する時期の様相を取り上げた第一部においては、まず第一章で、漢城期百済の横穴式石室の検討をおこなった。その型式学的分析および系統については、論者は、少なくとも5世紀において、玄室平面長方形の石室(Ⅲ・Ⅳ型式)と、玄室平面正方形の石室(Ⅰ・Ⅱ型式)が築造されたことを示すことができた。この検討成果をもとに、畿内地域における初期横穴式石室の起源と受容様相を検討したのが第二章である。分析の結果、論者は、畿内地域における初期横穴式石室の起源を漢城期百済に求めた。そして、百済的な要素がほぼ受容された1類型と、在地の伝統的な要素が強く反映された2類型に分類し、前者は渡来人が築造した墳墓、後者を在地首長が模倣築造した墳墓と考えた。こうした結論は、漢城期百済における横穴式石室についての新たな様相をもとに再検討した点が評価できる。

韓半島の南海岸で調査例が増加している倭系石室を検討したのが、第三章・第四章である。まず各石室を、北部九州系石室の構造をほぼ反映するもの(1類型)、肥後型石室などの有明海沿岸の石室の構造をほぼ反映するもの(2類型)、倭系要素に在地の要素が加えられて築造されたもの(3類型)に分類した。次に、栄山江流域における前方後円墳と倭系石室、および加耶地域における倭系石室の分布様相を共時的に検討した。その結果、同じ墳丘に造営される1類型から、単独に造営される2類型へ、そして古墳群を形成する3類型へと変化したと推定した。こうした検討をおこなうことによって、倭系石室が当該地域に築造された過程を類型化できたことは、その歴史的背景を考える上で重要な成果である。

これまでの議論を通して、第五章では、6世紀前後における百済と日本列島との関係について検討をおこなった。その結果、百済中央勢力とヤマト政権との関係が、畿内地域の初期横穴式石室に現れる一方、百済が栄山江流域への支配を強めていくなかで、ヤマト政権が九州地域の勢力を利用して百済を支援した結果が、倭系横穴式石室に現れると判断した。論者が、倭系石室の築造集団および被葬者を推定する手順については、さらに議論の余地がある。しかし、この時期における日本列島と韓半島の間を、巨視的に理解しようとする論者の意図は、ある程度まで達成されたと判断される。

第二部では、7世紀の様相を検討した。第六章・第七章では、横口式石槨の総合的な検討をおこなった。まず、前室と羨道の相関関係を基準として、横口式石槨をⅠ～Ⅲ類に分類し、出土土器と石槨の型式学的検討を通して、おおむねⅠ類からⅢ類への変化を確認した。こうした編年案は、シシヨツカ古墳など新たに発見された例を加えて検討されたものである点に、その研究意義が認められる。今後、石室に用いられた石材の材質や加工度などによる、詳細な系譜検討が期待される。また、横口式石槨の起源については、独自発生説を否定し、外部からの影響については高

句麗説を否定し、百済の陵山里型石室との関係を指摘した。ただ、日本列島内での型式学的変遷がみられることから、被葬者を渡来人とは想定できないと考えた。百済の埴室墳との関係が推測されてきた磚槨式石室を分析した第八章では、型式学的な検討をおこない、百済の例との比較を試みた結果、百済や渡来人とは関係がないと結論づけた。

以上のように論者は本論文を通して、6世紀における漢城期百済・栄山江流域・慶尚南道南海岸地域・畿内地域、および7世紀の畿内地域における外来系墓制を幅広く検討し、その結果をもとに、当該時期の地域間関係についての総合的な見解を示すことができた。今回の成果により、論者は古代日韓関係の考古学研究についてのさまざまな議論を展開していくため、その基礎を固めることができたといえよう。

ただ、論者が追求する比較検討をさらに深めていくためには、さらなる研究の展開が必要である。まず本論文では、熊津・泗泚期の百済横穴式石室、および6世紀代の九州における横穴式石室についての本格的な検討がなされていない。これらの地域における墓制の特質と展開過程を明らかにできれば、6・7世紀における日本列島および韓半島の地域間関係について、より深い理解ができるようになるはずである。また、全体的な理解を優先した結果、地域ごと、遺物ごとの詳細な理解について不十分な部分が散見される。韓国では最近、新たな発見が続いており、そうしたデータの収集分析と共に、今回十分に検討できなかった考古資料の分析を、さらに進めていく必要があるであろう。論者自身もこうした問題点は認識しており、今後の研究を通して、本論文の足らざる点を補完・発展していくだけの意志と能力を有していると判断する。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、平成27年2月17日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。